

論 文 内 容 要 旨

題目 An attempt to analyze the longitudinal psychological state of cancer patients in the active treatment stage
(積極的治療段階のがん患者における心理状態の経時的解析法の試み)

著者 Chise Ueoka Masahito Nakataki Yoshinori Ueoka
Atsuko Miyazaki Saki Taniguchi Tetsuro Ohmori
令和3年2月 公刊予定

The Journal of Medical Investigation 第68巻、第1,2号

内容要旨

はじめに

積極的治療段階におけるがん患者は、病名告知に始まり、短期間で治療法や手術の選択への意思決定が求められ、終末期とは異なる心理状態が推察される。がんの告知後、あらゆる病期で高い頻度の精神症状が出現するとの指摘や、症状に注目した診察、医療者-患者間のコミュニケーションも重視されるようになった。がん患者の心理に関する研究は、質問紙やインタビューによる調査等で一時点を捉えた横断的研究が多く、治療環境の変動が生じる積極的治療中のがん患者の心理を経過にそって理解するには不十分であった。今回われわれは、がん告知を受け、積極的治療および緩和ケアチームによるケアを受けた7症例の“心理面接記録”を対象に、患者の言動について“感情のタイプ化”を行い、治療過程に伴い経時的に変化する様子が視覚的に見渡せる“感情状態マップ”の作成を試みた。がん患者の心理(感情)状態の経時的な変化について、客観的な理解を可能にする新たな解析法を目指した。

方法

分析対象として、2007年～2010年間に徳島大学病院に入院歴があり、病名告知を受け、積極的治療を選択した成人がん患者のうち、臨床心理士による心理面接を実施した183名をスクリーニングした。入院初期から心理面接記録が5回以上あり、感情の読み取りが可能な詳細なカルテ記事を選定した。がん種別は、肺がん、悪性リンパ腫、膵がん、前縦隔腫瘍、胃がん、急性骨髄性白血病、食道がんで、40代から70代の男性7例であった。“患者の言動”のみを解析に用い、質的分析および類似した研究を基に分析した。日本語の感情を表す単語を〈感情タイプ〉、感情タイプを構成する感情を[感情カテゴリー]とし、

様式(8)

中村(1979)の“感情表現辞典”を基準にした。[感情カテゴリー]では分類困難な場合、Fischer, et al(1989)の感情階層的クラスター分析表を濱ら(2010)がまとめた“情緒カテゴリー”を参照した。次に、がんの告知日を0日とし、患者が経過にそって経験する治療イベントごとに、全感情タイプを定量化した。変化する心理状態を可視化する“感情状態マップ”の作成では、positive感情<relief/joy/liking>、negative感情<dislike/ sorrow/ fear/anger>、その他の感情<shame/surprise/excitement>について、それぞれ形と大きさとで識別できるように配置し、治療イベントに沿って提示した。

結果

心理面接記録データは合計211回あり、観察期間は、3.7ヵ月から21ヵ月間であった。全症例とも6~10種の感情タイプが出現し、刻々と変動する感情タイプの出現が視覚的に識別された。negative感情優位から治療と共にpositive感情が頻出した例、再発に直面しnegative感情とpositive感情を同時に示した例、経過不良による苛立ちとしてnegative感情が頻出したが医師との面談や一時外泊によりpositive感情が出現した例、心理支援開始当初のpositive感情から後半に手術への不安が出現した例などにおいて、心理状態の変動が識別できた。

考察

心理面接記録に記述された患者の言動について、その文脈の背景にある感情を読み取りながら感情分類した。感情タイプの定量化により、臨床経過にそった“感情状態マップ”として表わす解析法は、患者が治療過程の中で体験する心理状態を、経時的かつ視覚的に表現することを可能にした。Positive感情が頻出したのは、対象患者が積極的治療段階にあること、速やかに心身の苦痛を医療者に訴えられる入院環境にあったこと、心理面接や医療者の適切なサポートが存在したこと、などの要因が反映されたものと考えられた。医療者への[感謝]がストレスの多い治療場面でもpositive感情に繋がることは、医療者の適切なサポートの重要性を示唆した。臨床経過における患者の心理状態を視覚的に提示することは、患者心理への理解を容易にする可能性が示唆された。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	甲医第 1478号	氏名	上岡 千世
審査委員	主査 丹黒 章 副査 高山 哲治 副査 生島 仁史		

題目 An attempt to analyze the longitudinal psychological state of cancer patients in the active treatment stage
(積極的治療段階のがん患者における心理状態の経時的解析法の試み)

著者 Chise Ueoka Masahito Nakataki Yoshinori Ueoka
Atsuko Miyazaki Saki Taniguchi Tetsuro Ohmori
令和3年2月発行 The Journal of Medical Investigation
第68巻、第1,2号に掲載予定
(主任教授 大森哲郎)

要旨 積極的治療段階におけるがん患者は、短期間に治療法や手術の選択への意思決定が求められ、終末期とは異なる心理状態にある。これまでの研究は一時点を捉えた横断的研究が多く、患者心理を経過に沿って理解する経時的解析は不十分であった。そこで申請者らは、面接記録をもとに感情をタイプ化し、心理状態の変化を経時的かつ視覚的に見渡せる“感情状態マップ”の作成を試みた。分析対象として、2007年～2010年の間に徳島大学病院に入院歴があり、病名告知を受け、積極的治療を選択したがん患者のうち、心理士による面接を実施した183名をスクリーニングした。面接記録が5回以上あり、感情の読み取り可能な詳細な記録を7例選定した。がん種は、肺がん、悪性リンパ腫、膵がん、前縦隔腫瘍、胃がん、急性骨髄性白血病、食道がんで、40代から70代の男性であった。

分析方法は、患者の言動を抽出し、中村(1993)の感情表現辞典及び Fischer ら(1989)の感情階層的クラスター分析表、濱ら(2010)の情緒カテゴリーを用い、〈感情カテゴリー〉を参照して〈感情タイプ〉を分類した。ついで、がんの告知日を起点とし、患者が経験する治療イベントごとに感情タイプを定量化した。“感情状態マップ”は、positive感情〈relief/joy/liking〉、negative感情〈dislike/sorrow/fear/anger〉、その他の感情〈shame/surprise/excitement〉に分け、形と大きさを識別できるように治療イベントに沿って提示した。

得られた結果は以下の通りである。

1. 心理面接記録データは合計 211 回、観察期間は 3.7 から 21 カ月であった。全症例とも 6~10 種の感情タイプが出現し、経過にそって刻々と変動する感情タイプの出現が“感情状態マップ”上に視覚的に識別された。
2. Negative 感情優位から治療と共に positive 感情が頻出した例、再発に直面し negative 感情と positive 感情を同時に示した例等、症例毎に心理状態の変動が識別できた。

本研究は、がん患者が治療過程で体験する心理状態を、感情タイプの分類と定量化により、経時的かつ視覚的に表現することを可能にしている。がん患者の心理状態の分析を促進し、職種間の理解の共有にも有用である。がん緩和医療における臨床的意義は大きく、学位授与に値すると判定した。